

記述は、あるいは「入学準備学級」の枠を越えるものかもしれない。しかし、他の全てのことにとっての基礎になることであるので、境界を狭くとらないことが必要と思われた。

11. Guardini, Vom lebendigen Gott, Mainz 1936 60頁以下を参照。
12. これらの考えが神の自由に抵触するものを意味していないことを特に強調する必要はないであろう。この点においても神は「主」であり、いかなる被造物も神を拘束することはできない。そこから、あの近さと分有も、神の自由にもとづいてのみ、そして恩恵としてのみ可能なのである。そうではあるが、ここで問題になっているのは、本当の近さであり、本当の分有ではある。
13. この点に関しては、Guardini, Der Herr, Betrachtungen über die Person und das Leben Jesu Christi, Würzburg 1940 の625頁以降を参照。
14. この点に関しては、Guardini, Die christliche Liebe, eine Auslegung von 1 Kor 13, Würzburg 1940 を参照。
15. この点に関しては、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940 104頁以下参照。
16. この点に関しては、Guardini, Das Gebet des Herrn, Mainz 1934 参照。
17. この点に関しては、Guardini, Vom lebendigen Gott, Mainz 1936 123頁以下と147頁以下を参照。
18. "In Spiegel und Gleichnis"の中でわたしはこのような隠れた祈りを幾つか取り出してみようとしたことがある。(2. Aufl. Mainz 1940, 74頁以下。[7. Aufl. Mainz-Paderborn 1990])。
19. 典礼の中の祈禱文についてはBesinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939 120頁以降も参照。
20. 聖人たちの著作においては時として、自己蔑視の極めて強烈な表現が見出されることがある。これらの表現は、それらが由来している状況と、それらの表現を用いている人の人格全体から見て、初めてその意味を持つものである。従って、これらの表現をタイプの異なる生活状況にその

原 注

1. 神に三つのペルソナがあることについては次章を参照。
2. 詩篇の番号はヴルガータ訳による。[] 内に原典の番号を示す。
3. この方向での試みの幾つかについては、Guardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931の71-81頁および152-161頁を参照。
4. 創造についての話において「日」がどういう意味を持ち、いかなる意味を込めて「神の休息」という言い方が用いられているのかといった問いに立ち入ることはここではできない。この問題全体についても、Guardini, Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939の85-99頁を参照されたい。
5. ただし、教会のドアには許容しうるかぎり長時間にわたって鍵が掛かっているということも必要であろう。もちろん、儀式の時間以外は閉めておくということにも種々の理由がある。とはいえ、それらの理由は、人々が教会に対して自分の家に対するごとき帰属感を失うことになるかもしれないという可能性と比較して真に良心的に検討されねばならない。[自分の出入りのために] ドアに鍵が掛かっていない時間が僅かしかない「自分の家」とは、いったいどのような家なのであろうか。— 聖なる場所の本質に関してはGuardini, Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I, Mainz 1939, 62-84頁を参照。
6. この点についてはGuardini, Kultbild und Andachtsbild, Würzburg 1939を参照。
7. この点でのひとつの提案がGuardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931 83-84頁にある。
8. この全体については、Guardini, Heilige Zeichen, Mainz 1933 および Liturgische Bildung, Rothenfels a. M. 1923 を参照。
9. 本章におけるこのアイディア、および関連するアイディアについては、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940の 28-50頁 [第六版 Mainz-Paderborn 1988 では45-65頁]を参照。
10. キリスト教の神現実と、祈りに対するその意味についてのここから先の



- Lehre vom Tode, der Läuterung nach dem Tode, Auferstehung, Gericht und Ewigkeit. Würzburg 1940.
29. 浄化の時期にある魂たちとの関係については、Guardini, Das Fegfeuer, "Christliche Besinnung" シリーズ17号 Würzburg 1940を参照。
 30. この点については、Guardini, Die Heiligen, "Christliche Besinnung" シリーズ25号 Würzburg 1940 参照。
 31. この点については、Guardini, Nachwort zu: Bruder Leo, Spiegel der Vollkommenheit, übersetzt von Wolfgang Rüttenauer, Leibziz 1935 参照。
 32. 既出のGuardini, Der Rosenkranz Unserer Lieben Frau, Würzburg 1941 を参照。
 33. この点については、Guardini, Vom Leben des Glaubens, Mainz 1935; Glaubensgeschichte und Glaubenszweifel, "Christliche Besinnung" シリーズ 5号 Würzburg 1939参照。
 34. 以下の諸点については、Guardini, Vom Geist der Liturgie, Freiburg 1939; Liturgische Bildung, Rothenfels 1923; Besinnung vor der Feier der heiligen Messe I und II, Mainz 1939; Ein Wort zur liturgischen Frage, Mainz 1941を参照。
 35. この言葉は、たとえば、司祭の祈りこそが本来は十全の価値を持つ祈りと見なした上で、そのような祈りと比較して民間信心業を貶めようとするものではない。このような誤解の可能性があるとの示唆を受けたので、この点を予め断っておきたい。この言葉はむしろ、以下において話題にするような特徴を持つ祈りの或る形式を指すものである。



- まま移し変えたり、ましてやキリスト教的現存在の基本姿勢そのものとしたりしてはならない。
21. この点についてはGuardini-Messerschmid, Deutsches Kantual, Mainz 1931, 127頁を参照。
 22. Der Rosenkranz Unserer Lieben Frau, Würzburg 1940.
「聖母のロザリオの祈り」天使館発行
 23. この点についてはGuardini, In Spiegel und Gleichnis, Mainz 1940 [Mainz-Paderborn 1990] 96頁以下を参照。
 24. もちろん、このことをもって、単なる、心理学的な意味での「意識」の領域は超えられ、内的生活の全領域が問題となっている。従って、本来は、「意識」の代わりに、習得した習性、人格の形成、実現といった言い方をしないといけないのかもしれない。ないしは、どういう表現をとるのがよいとしても、信仰の内容が具体的実存の内容となることと言うほうがよいのかもしれない。それにも拘らず、「キリスト教的意識」という表現には幾つかの利点があるので、暗示したような比較的広い意味においてではあるが、これを残すのがよいと思う。
 25. この点については、Guardini, Welt und Person, Würzburg 1940, 137頁以降 [Mainz-Paderborn 1988, 173頁以降] および Was Jesus unter der Vorsehung versteht, "Christliche Besinnung" シリーズ 1号 Würzburg 1940参照。
 26. この側面に言及するとしても、摂理思想の包括的側面を忘れてはならない。後者に依るなら、神は文字通り一切の出来事を統裁しておられる。それも、啓示の対象となっている領域以外のところにおいても、しかも、神の国についてのあの心配りを人間が自分の心の中に取り上げる以前においてもである。現在のこの箇所で言及されているのは、摂理に関するメッセージのうち、山上の説教の中に登場してくるかぎりでの、その中心点のみである。
 27. この点については、Guardini, Das Gute, das Gewissen und die Sammlung, Mainz 1931 18頁以降および46頁以降を参照。
 28. この点については、Guardini, Die letzten Dinge. Die christliche



としての顔を指すために一般に用いられる語であり、面輪を当てた Angesicht も、面を当てた Antlitz も、今日の用法からするなら、その雅語である。

10. ドイツの家庭の、特に台所を兼ねた食堂や居間などでは十字架は壁面ではなく、部屋の一隅の天井近くに部屋の中心に合わせて斜め下を向く形で懸けてあることがしばしばある。
11. 池田敏雄著 『教会の聖人たち』上巻 一九九六年（第三版）サンパウロ社一五一頁にも紹介されている有名なエピソード。稲垣良典教授もその『トマス・アクィナス』（講談社学術文庫版 一九九九年）の二二七頁で同じ逸話を紹介し、典拠として Bernardus Guidonis を挙げておられる（二三六頁記載の注一六参照。八三頁記載の注三も）。聖トマスの伝記作者として名高い Guillelmus de Tocco も "Ystoria S. Thomae de Aquino" の五二章においてこのエピソードの元になったと考えられる話を伝えている。ただし、そこに記されているのはキリストが聖トマスに賞賛のことばをかけられた話までで、二人の間の「褒美についてのやりとり」に関する言及はない、(Fontes Vitae S. Thomae Aquinatis. cura et labore D. Prümmer O.P. Tolosae では一二六頁、Ystoria S. Thomae de Aquino de Guillaume de Tocco (1323). Edition critique, introduction et notes Claire de Brun-Gouanvic Toronto 1996 では一八九頁)。
12. 英訳は出典としてアヴィラの聖テレジアの Poem 9, "Nada te turbe" を挙げている。
13. 『三位一体論』第十四巻において人間の魂が神の似姿であることを解説する際に、神のことが分かる能力があり (eius [=Dei] capax est)、神を分有することができること自体が魂を神の似姿たらしめているとし、De Trin. l. XIV, c. 8 (ML 42, 1044)。
14. カンタベリーの聖アンセルムスの『プロスロギオン』第十三章、なかなく末尾の「あなたは、主よ、唯一無比の仕方で限界なく永遠なるお方です、とはいえ、他の霊たちも限界なく永遠です」を下敷きとした表現と思われる。(St. Anselm's Proslogion, transl. with an introd.

訳 注

1. 原語は秩序、整理、配列、規律、規則、命令といった広範な意味を持つ。
2. 原語は実践することよりも、むしろ練習、訓練、さらには熟達すること、身について習慣となることといった意味を持つ。英語の 'practice' にはほぼ対応する語。
3. 募金といった意味にも用いられることがある語であるが、本書においては、「散漫になっている心、精神、集中力を集めてきて、落ち着かせ、集中すること、潜心すること」を意味する。
4. 実存と訳されることもある語。ゲアルディーニにおいては本質に対立する意味で用いられるよりも、生命、生活、なかなく人間が生きていくということの現実の姿、特に神との関連において見た人間の具体的な生き方、さらには被造世界の現実全体などを意味する。「神の生命の現実」といった意味合いで神についても用いられている。本訳書においては一貫して「現存在」を当てている。
5. 「ミュンヒハウゼン男爵の冒険」として知られる話のひとつ。Gottfried August Bürger, Wunderbare Reisen zu Wasser und zu Lande, des Freiherrn von Münchhausen. Insel Verlag, Frankfurt a.M. 1968 (1986) 31頁。
6. 原語は *innewerden* である。「覚っている」と訳出している語 *innesein* とともに、本書においてゲアルディーニが好んで用いている語で、一般には「気付く」、「気付いている」といった意味に用いられる語であるが、普通われわれが「気付く」場合より深い層で起こっていることを指している。本訳書では時に「心の中心に据える」、「心の中心に座を占めている」と訳出してもいる。
7. 二五六頁の記述についての訳注20を参照。
8. 原語は「ある－いる－存在する」を意味する一語。英語の 'be' に当たる。
9. 以下において^{おもわ}面輪、^{おもて}面、顔と訳し分けた語は、いずれも原義からするなら、「見る、見つめる、視線を向ける」といった動詞と関わりを持つ。なお、ここで顔という訳語を当てた Gesicht が、生物学的身体の一部

なお、十字架といわゆる三角メダイの間にある五個の玉のうち中央の三個の小玉のところでは、それぞれ信、望、愛の強化、深化をイエスに願う関係文が追加される。

19. 『アントニウスの生涯と回心』の中で伝えられている話。 MG 26, 860 参照。
20. "solus cum solo"ないしは"sola cum solo" をモットーとして孤独のうちに神との一致を求めて荒野で修業を続けた隠修士たちの精神を指すと思われる。アウグスティヌスによる改鋳とは、『告白』の冒頭近くの有名な言葉「あなたは、確かに、私たちをあなた自身に向けて創り給うたので、私たちの心はあなたのなかにいこうまでは、安きを得ないのである。」(第一巻第一章一、今泉三良訳 河出書房 二五頁)を指すと思われる。ニューマンについては、John Henry Cardinal Newman, Apologia Pro Vita Sua, New York 1950 (The Modern Library) 二〇三頁を参照。
21. いうまでもなく、[当時の] ドイツにおける状況を反映している。

and philos. comment. by M.J.Charlesworth University of Notre Dame Press Notre Dame, London 1979 = reprint of the first edition by Oxford University Press 1965 一三四頁参照。)

15. es. 英語の'it'にあたる中性の人称代名詞。
16. 『新カテキズム』は二七〇五番以下においてmeditatioの解説をしている。ドイツ語版本文はdas betrachtende Gebetと訳出したうえで、meditatioのドイツ語形die Meditationを同格語として加えている。ドイツ語のbetrachtenという動詞は祈りとしての「黙想する」の意味にも、知的な意味での「考察する」の意味にも用いられる。ラテン語のmeditariも本来は「省察する」、「反省する」の意味を持つが、本訳書においては、祈りの意味でのBetrachtungを「黙想」、Meditationを「瞑想」と訳し分けている。
17. 聖フランシスコの『小さき花』("I Fioretti")第二章にあるベルナルド修士が伝えたと言われているエピソード。イタリア語原文での言葉は直訳すると「わが神よ、わが神よ」であるが(『聖フランシスコの小さき花』久保正夫訳 新潮社版 大正 5年 5頁参照)、欧米の現代語訳では、ラテン語版にもとづいてしばしば本書にあるように訳される(St. Francis of Assisi, Writings and Early Biographies, Franciscan Herald Press Chicago 1973 一三〇三頁とそこに付された注1を参照)。
18. 「一連毎に一玄義——本訳書では秘密——を黙想する」仕方としては、日本では、黙想すべき各玄義を要約したテキストを各連を始める前に先ず唱え、その内容を心に保ち思いめぐらしつつ「めでたし」を唱えていくというスタイルが一般的と思われるが、ドイツでは、「めでたし」を唱える毎に、テキスト中の「イエズス」のあとに、各玄義を短く纏めた関係文をその都度追加するスタイルが採用されている。日本で行われているスタイルは、黙想する玄義の雰囲気や予め作っておいて、いわばその雰囲気の中を「めでたし」を唱えながら逍遙していくに対し、ドイツでは黙想する玄義をその都度表現的に口にすることによって、徐々に雰囲気や盛り上げていく構造になっていると言ってもよいかもしれない。